『認知類型論的観点からみたモダリティ研究―文法化のあり方をめぐって―』（平成 17 年度～平成 20 年度　科学研究費補助金研究　基盤研究(c)　課題番号：17520279　研究代表者：黒滝真理子　研究成果報告書）2009 年 3 月, pp.131-162.

# タイ語の非現実性マーカーが生起する意味文脈の歴史的変化*

高橋清子

## 1　はじめに

現代タイ語には，動詞句の前に生起しその動詞句の表す事態の非現実性[1]を標示する *cà?* という語がある．本稿では，13 世紀末から 20 世紀後半に刻まれたタイ語石碑文[2] から採集した非現実性マーカー *cà?* とその起源語である動詞 *càk* を含む表現（高橋 2007）を分析し，*cà?*，*càk* が生起する意味文脈（非現実性マーカーと親和性を持つ非現実事態）の歴史的変化を考察する．

非現実事態は「推量」,「希求（意志，命令，要請・願望）」,「未実現」,「可能性」,「妥当性」,「反語」,「仮想」,「一般化した事態」など多岐にわたるが（尾上 1999），それらの事態の意味の結びつきには体系性があり，意味地図によってその体系的な関連性を空間的な近さや遠さに置き換えて表示することができる（van der Auwera & Plungian 1998, Narrog 2005a）．そこで，タイ語石碑が制作された約 700 年間を便宜的に 4 つの時期に分け[3]，それぞれの時期の非現実性マーカーが生起する意味文脈の範囲を意味地図によって示し，その変遷を観察することにする．非現実性マーカーが生起する意味文脈は，非現実性マーカーを持つどの言語でも同じであるとは限らない．例えば「習慣」,「未来」,「命令」,「疑問」,「否定」などの文脈においては，ある言語では非現実性マーカーが生起し，ある言語では生起しないことが知られている（Mithun 1995, Elliott 2000）．意味地図を活用して，タイ語の非現実性マーカーが生起する意味文脈の範囲が歴史的にどのように変化してきたのかを明示的に示したい．

通時的言語資料をもとに非現実性マーカーが生起する意味文脈にどのような変化が生じたのかを分析することは，曖昧で未分化だったモダリティ概念（非現実性マーカーと親和性を持つ概念）が徐々に分化し特定的なモダリティ概念として認識される

---

* 本稿は，日本言語学会第 134 回大会（2007 年 6 月 16-17 日，千葉）において同題目で発表した内容を大幅に加筆修正し，まとめ直したものである．草稿の段階で，新里瑠美子氏とハイコ・ナロック氏から有益なコメントや示唆をいただいた．ここに記して感謝申し上げる．本稿に不備や誤りがあるとすれば，すべて筆者の責任である．

1 「非現実性」の定義については第 3 節を参照せよ．非現実性マーカーを持つ言語としてよく知られているのは，北米地域のネイティブ・アメリカン諸言語とパプアニューギニア地域の諸言語である（Palmer 2001）．

2 本稿末に添えた資料（『石碑文集』）一覧を参照せよ．最も古いタイ語石碑の推定制作年は 1292 年とされているが，1354-1376 年という説もある（Prasithrathsint 2006）．石碑文はいつの時代も政治や宗教に関する事柄をつづったものが多い．

3 ①スコータイ王朝の時代（この時代に作成されたと考えられる石碑の推定作成年 1292-1438），②アユタヤ王朝およびトンブリー王朝の時代（同 1438-1782），③ラタナコーシン王朝ラーマ 1 世～6 世の時代（同 1782-1925），④ラタナコーシン王朝ラーマ 7 世～9 世の時代（同 1925-1978）．詳しくは注 12 を参照せよ．

ようになる過程を明らかにする作業，言い換えれば，その分化パタンを一般化する作業，であるといってよい．タイ語の通時的言語資料を分析することによって，印欧語や中国語の通時的研究を基礎としたこれまでのモダリティ概念の分化パタンについての仮説が妥当なものであるかどうかを検証したい．ただし，本稿では「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化パタンについてしか仮説を提示することができなかった（第 5.3 節）．なぜなら，「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化パタンだけが唯一，限られた分析資料からでも推論が成り立つ分化パタンだったからである．これまでの通説である「能力可能から状況可能へ」という分化パタンとは逆の「状況可能から能力可能へ」という分化パタンが認められた．本稿の分析結果がモダリティ概念の分化パタンの類型を解明しようとする研究の一助になればよいと思う．

本稿の構成は以下の通りである．第 2 節と第 3 節では，現代タイ語の非現実性マーカー *càʔ* に関する先行研究と非現実性に関する先行研究を紹介し，*càʔ* の意味機能についての筆者の見解を述べる．第 4 節では，石碑文コーパスの *càk* と *càʔ* が生起する意味文脈について論じ，意味地図によってその意味文脈の範囲が歴史的にどのように変化してきたのかを明らかにする．第 5 節では，第 4 節の分析結果をもとに，タイ語におけるモダリティ概念の分化パタンに関する筆者の仮説を提示する．第 6 節で結語を述べる．

## 2　タイ語の非現実性マーカー *càʔ*（＜*càk*）について

Diller 1988, 2001 によると, *càʔ* の起源語は ‘to intend, consider, desire’ という意味を表していた動詞 *càk* であり，タイ諸語の祖語にまで遡れば ‘to recognize, know’ という意味を表していただろうという．そして *càk* が *càʔ* に変化し始めたのは 14 世紀半ばであり，両者の使用頻度が逆転したのは 15 世紀半ばから 16 世紀半ばの間であるという．本稿の調査からも *càʔ* が生まれたのは 14 世紀であろうことが裏付けられた．*càk* は 20 世紀以降の石碑文でも使用されてはいるが，現代タイ語では形式的な慣用表現（公文書で使用される感謝の表現「*càk khɔ̀ɔp khun ŷiŋ* ‘誠に感謝致し候’」など）にしか使われない．

語形変化のない孤立語に分類されるタイ語の語には，実質的意味と機能的意味の両方を表すことができる語が多い．タイ語では実質的意味を持つ名詞や動詞が機能的意味を表す助辞の機能を担うようになっても何ら音形変化を被らないことが多いからである（Bisang 2004）．しかし非現実性マーカー *càʔ* は *càk* という動詞が音韻弱化の過程を経て誕生した助辞であると考えられる．注意すべきは，タイ語の非現実性マーカー *càʔ* はあくまでも非必須マーカーであることだ．文法範疇概念（性，数，時制，ムードなど）の値を必ず特定しなければならない言語（それらを特定しなければ非文法的な発話となってしまう言語）の文法範疇マーカーとはその点で異なる．

現代タイ語の *càʔ* の意味機能について研究者の間に意見の一致が見られるわけではない．その語類の認定も研究者によって区々である．印欧語文法になぞらえてタイ語文法を記述しようとする研究者は *càʔ* を未来時制マーカーであると定義する．[4] 一方で *càʔ* は未来時制マーカーではないと考える研究者も多い．[5] 筆者の考えは，*càʔ* の本質はモダリティマーカーであり，推量や必然といった様々な意味を表すという Srioutai 2004 の考えに近い．Srioutai は「タイ語の態，他動性，時制などの解釈は，通常，談話文脈に基づく」という Diller 1993 の考えを肯定し，*càʔ* が表すと考えられている未来性の意味は談話文脈から生成されるものであり，*càʔ* の語義ではないと主張する．反実仮想の文脈では *càʔ* が必ず生起することが観察されており（Srioutai 2004）[6]，認識的モダリティを表す複合形式 (1) や関係代名詞の後に非現実事態の補語を導く形式 (2) にも必ず *càʔ* が使われる．

(1)　認識的モダリティを表す複合形式（単独では認識的モダリティの意味を持た

---

[4] (a) พระยาอุปกิตศิลปสาร phrayaa ʔùpakìt sǐnlápàsǎan 1918/1992 は未来時制を表す助動詞であるとする．(b) Scovel 1970 や Rangkupan 2004 も未来時制を表す preverb あるいは preverbal operator であるとする．(c) Ekniyom 1979 や Diller 1988, 1993, 2001 は未来時制と非現実性の両方を表す auxiliary であるとする．

[5] (a) Noss 1964 は仮定的状況や推定的行為を表す particle であるとする．(b) Kullavanijaya 1968 は意図を表す pre-verb であるとする．(c) Sindhvananda 1970 は心理的および物理的な決定性を本来的に表す pre-verb であるとする．すなわち，人間の内部に沸き起こる意図，意志，決意，計画や，他の人間，制度，環境，状況によって決定付けられた出来事や，ある状況の下での自然の結果や可能性や，一般に認められた事実などを表す断言マーカーであるという．(d) Kanchanawan 1978 は可能性，断言，意志，決定性を表す pre-serial verb であるとする．(e) นววรรณ พันธุเมธา náwáwan phanthúʔmeethaa 1982/1984 は未実現相（まだその事態は起こっていないが次に起こる）を表す時間マーカーであるとする．(f) Sriphen 1982 は時間概念に関わるモーダル助辞であるとする．意志や予測といった意図を表すマーカーであるが，副次的に未来性を表すマーカーも兼ねていると考える．(g) Booyapatipark 1983 は見込み相を表すマーカーであるとする．しかし，意図，願望，計画，推測，特徴的行動，習慣性，予想，予期された事実，科学的事実といったモダリティ概念も表すと指摘する．(h) Savetamalaya 1988 は意図を表す auxiliary であるとする．(i) Rangkupan 2001 は非叙実（非断定）を表すモーダル助辞であり，非現実性を表す形態素であるとする．(j) Muansuan 2002 は出来事の予備段階を表す相形態素であるとする．しかし，ある特定の状況で発生するあるいは真実となる可能性があるという意味も表すことができ，モーダル形態素に似ていることを認める．(k) Iwasaki & Ingkapirom 2005 は当該命題が事実として容認され得る程度が低いことを表すマーカーであるとする．すなわち，聞き手にとっては事実として受け止めがたいかもしれないという話し手の疑念を表す pre-verbal modal particle であるという．
なお，Sindhvananda 1970 と Kanchanawan 1978 の説明で用られている “assertion” という語は，命題事象レベルの概念である「断言，明言」（本稿の用語では「妥当性」）を意味すると筆者は考える．一方，Hooper 1975，Givón 1982，Lunn 1989, 1995，Bybee et al. 1994，Palmer 2001，Rangkupan 2001 は，“assertion” を発話行為レベルのいわゆる叙法の概念である「叙実（断定叙述）」を意味する用語として用いている．非現実性を「非叙実」と特徴付けるのか（e.g. Bybee et al. 1994，Palmer 2001，Rangkupan 2001），あるいは「非叙実」でも「叙実」でもあり得ると考えるのか（e.g. Hooper 1975，Givón 1982，黒滝 2005），研究者によって意見が異なる．

[6] ただし石碑文コーパスには反実仮想文脈での *càʔ* の生起は見られなかった．

ない語と *càʔ* の複合体）：
*hěn càʔ* ‘～のようだ’，*nâa càʔ* ‘～のはずだ，～べきだ’，*thâa càʔ* ‘～のようだ’，*rim càʔ* ‘ほとんど～だ’ など（นววรรณ พันธุเมธา náwáwan phanthúʔmeethaa 1982/1984，Sriphen 1982）

(2)　関係代名詞 *thîi* の後に非現実事態補語を導く形式：
*phʉ̂a thîi càʔ* ‘～するために’，*phɔɔ thîi càʔ* ‘～するのに十分だ’，*tôŋ kaan thîi càʔ* ‘～することを欲する’，*khít thîi càʔ* ‘～しようと考える’ など（三上 1996，Ekniyom 1982）

これらの事実から筆者は現代タイ語の *càʔ* は非現実性を標示するモダリティマーカーであると考える．

## 3　非現実性について

非現実性の属性を持つ事態とは具体的にどのような事態であろうか．尾上 1999 は非現実事態を「話者の立っている現実世界で話者が経験的に把握していない事態」と定義する．尾上 2004 によると，話者にとっての非現実領域は次の 3 種類に大きく分類できるという．(a) この世で未実現の領域；(b) 推理・推論，仮定世界など観念上の領域；(c) この世で既実現ではあるが話者の経験的把握を超えた「よくわからない」領域．Chafe 1995 の考えでは「客観的現実である直接知覚や記憶に合わない，あるいは通常の予想に合わないと判断される事態で, 想像によるもの」が非現実事態である．Johnson 1981 は事態の存在の仕方を現実と非現実に二分する．非現実の事態は「実際どのように生起するのか観察者の人間にはわからない事態」であり，未実現の事態，投影された事態，仮定された事態，歴史的事実ではない事態，今から生起する事態などがそれにあたると説明する. Elliott 2000 も事態表現は現実か非現実かに二分できると考え，そうした事態の現実性をひとつの文法範疇と捉える．事態の現実性という文法範疇は現実（現実世界の事態表現）と非現実（非現実世界の事態表現）という対立する 2 つの値で構成されるとする．

文法範疇の非現実ムードを表す用語としてよく用いられる “irrealis”（Sapir 1930/1992）や印欧語文法用語の “subjunctive” あるいは日本語文法用語の「未然」という用語の他，非現実性を表すために言語学者が用いる語には様々なものがある。[7]

[7] “manifesting”（Whorf 1950: 59），“nonfactive”（Hooper 1975: 91），“non-factivity”（Lyons 1977: 795），“irrealis-assertion” (being asserted with doubt, as hypotheses; being weekly asserted)（Givón 1982: 24; 1994: 268），“non-actual”（Chung & Timberlake 1985: 241），“non-assertion”（Bybee et al. 1994: 239; Bybee & Fleischman 1995: 9），“nonfactuality”（being undetermined with respect to its factual status, i.e., is

それらの語の定義は一様ではないが，非現実性という言語学概念を扱う研究者にとっての争点のひとつは「非現実性を命題事象レベルの概念と捉えるか，発話行為レベルの概念（叙法）と捉えるか」という点だろう．Narrog 2002, 2005b や Elliott 2000 は前者の立場であり，Bybee et al. 1994 や Rangkupan 2001 は後者の立場である．

確かに Fleischman 1995 が指摘するように，非現実性の背景には「話し手の確信や思い入れの欠如」がある．また Lunn 1989, 1995 によると，スペイン語では「事実性が低い，あるいは新情報に欠けると話し手が判断する」ときは非叙実となり “subjunctive” の標示を受けるという．そうしたことを根拠として，非現実性とは非叙実 non-assertion を意味すると考える研究者がいる．[8] しかし Narrog 2005b が主張するように，現実事態か非現実事態かという事態の現実性[9]は命題事象レベルで特徴づけが可能な概念であり，話し手が強い確信を持って断定し叙実するかどうかという発話行為レベルでの区別が唯一の分類基準では必ずしもないはずだ．だがもちろん，非現実事態が命題事象レベルの概念であるとしても，発話行為レベルに接した主観性の高い概念である．

本稿では，非現実性を命題事象レベルあるいは発話行為レベルのどちらか一方のレベルの概念であるとは考えず，主観性の高い命題事象レベルの概念と発話行為レベルの概念のどちらにも非現実性は関わっていると考える．図 1 に示すとおり，非現実性の特徴を持つ命題事象レベルの概念として「意志（決意，目的）」，「願望」，「仮定（条件）」，「切迫」，「能力可能」，「状況可能」，「妥当性」，「当為（許可，義務）」，「推量（予測）」，「一般化事態（必然，習慣）」，「結論（反語）」が挙げられ，非現実性の特徴を持つ発話行為レベルの概念として「意図（命令, 禁止, 要請, 勧告, 奨励, 賞賛など）」，「譲歩仮定」が挙げられる．これらはいずれも話者が現実世界で経験的に把握しているとは言えない事態である．

| | | |
|---|---|---|
| *話し手志向* | 意図（命令，禁止，賞賛など） | 譲歩仮定 |
| ↑ | 妥当性，当為（許可，義務） | 推量（予測），一般化事態（必然，習慣），結論（反語） |
| ↓ | 能力可能 | 状況可能 |
| *命題事象志向* | 意志（決意，目的），願望 | 仮定（条件），切迫 |
| | *意志的・希求的* | *非意志的・非希求的* |

図 1：本稿の分析に関係する非現実事態の分類

図 1 は，Narrog 2005a に倣い「客観的な命題事象志向のモダリティ概念か，主観的

neither positively nor negatively factual）（Narrog 2005b: 182, 184）など．

[8] 注 5 を参照せよ．

[9] ナロック 2001 および Narrog 2002 は「事実性」という用語を使用している．

な話し手志向のモダリティ概念か（主観性の程度の高低）,「人間の願望や意志が関わる意志的・希求的なモダリティ概念か，それらが関わらない非意志的・非希求的なモダリティ概念か（意志性の有無）」という 2 つの基準に基づいてモダリティ概念を分類したものである．[10] 前者の基準が縦軸，後者の基準が横軸になっている．縦軸の下に位置すればするほど，より客観的な命題事象に近づき，上に位置すればするほど，より主観的な発話行為に近づく．横軸は左右に分割され，左側が意志的事態，右側が非意志的事態である．縦軸の主観性は連続した変数値が考えられるが，横軸の意志性は不連続な 2 つの固定値しか考えられないということである．本稿ではこの図を「非現実事態の意味地図」の原型とし，次節からの *càk*，*cà?* が生起する意味文脈の変化の分析に使う．ただし図 1 は非現実事態の種類をすべて網羅している完全な非現実事態の意味地図であるというわけでは決してない．あくまでも本稿の分析に関係する特に顕著な非現実事態だけを筆者が恣意的に取り上げ，その相互の関連性（意味の近さや遠さ）を示すために「客観的か主観的か（主観性）」,「意志的か非意志的か（意志性）」という 2 つの基準を設けて意味地図としたものである．

ナロック 2001 は,「可能」を「願望」や「様相」（本稿の用語では「切迫」）よりも主観性の程度の低い概念とみなしている．しかし筆者は,「能力可能（特定個人に焦点を当て，事態の出現を可能にした要因をその人の能力に帰する永続的な可能）」であれ,「状況可能（状況が許せば一般的に起こりうる一時的な可能）」であれ,「可能」には必ずどのような意味で可能であるのかという話し手の可能性判断が伴うので,「可能」は命題事象寄りの「意志」,「願望」,「仮定」,「切迫」よりは主観性の程度が高いと考える．図 1 で「妥当性」,「当為」,「推量」,「一般化事態」,「結論」という 5 つの概念と,「意志」,「願望」,「仮定」,「切迫」という 4 つの概念がそれぞれ横一列に並べられているのは，それらの概念の間に主観性の程度差があるのかどうかはっきりしないからである．いずれにせよ,「能力可能」,「状況可能」という概念は「妥当性」,「当為」,「推量」,「一般化事態」,「結論」という話し手の判断が前景化される概念よりは主観性の度合いが低く,「意志」,「願望」,「仮定」,「切迫」という事象参加

---

[10] Narrog 2005b の考えでは,「意図」と「譲歩仮定」は発話行為レベルの概念であり，その他は命題事象レベルのモダリティ概念である．そして「当為」と「推量」がもっとも典型的なモダリティ概念である．ナロック 2001 は，モダリティ範疇を「話し手の事実性判断をより純粋に表す典型的なもの」と「出来事とその参加者（文内容）との意味的な結びつきがより強い，より非典型的なもの」に二分し，前者を「話し手中心のモダリティ」，後者を「できごと中心のモダリティ」と呼んでいる．ただし両者は便宜的に分けられた概念であり，別個の概念ではなく連続する概念であるという．
Chung & Timberlake 1985 は事態の非現実性を決定する基本因子として「事態の現実性を判断する主体（話し手）」と「事態の実現に責任を負う事象参加者」という 2 つの因子を認めるが，ナロック 2001 が「典型的なモダリティ概念」と呼ぶ概念は，第一の因子（話し手）のほうが中心的役割を担う非現実事態に相当し，ナロック 2001 が「非典型的なモダリティ概念」と呼ぶ概念は，第二の因子（事象参加者）のほうが中心的役割を担う非現実事態に相当するといえる．

者の動向や場面条件が前景化される概念よりは主観性の度合いが高いと筆者は考える．

また，ナロック 2001 は「彼は 20 キロ泳げる」といった能力可能事態に働いている力（能力）に必ずしも意志性は関与しないと考えるが，筆者は能力可能事態には（背景的，非明示的にではあっても）必ず意志性が関与すると考える．能力可能事態の背景には動作主あるいは経験者の意欲や願望（例えば「20 キロ泳ぎたいのだが」,「我慢できればいいのだが」といった潜在意識）が常に存在するはずだからである．

本稿では「意図」と「意志」を区別する．本稿の分類では，他人への働きかけ（間主観性 ‘intersubjectivity’ Traugott & Dasher 2002）が強いものを「意図 intention」とし，自発的な意欲が強いものを「意志 volition」とした.「意図」は対人的, 発話行為的で, 話し手志向（聞き手志向）が強い概念であり,「意志」はより客観的で，命題事象志向が強い概念である．

*cà?* の意味に関する先行研究の中で「未来時制」あるいは「未来性」と呼ばれている非現実事態のことを本稿では「予測」と呼ぶ.「予測」は「推量」の一種である．

## 4　*càk*, *cà?* が生起する意味文脈の歴史的変化

この節では通時的言語資料を用いて *càk*, *cà?* が生起する意味文脈の歴史的変化を詳しく考察する．タイ国内および近隣諸国で発見されたタイ語の石碑に刻まれた文章を収録した『石碑文集』に目を通したところ，635 の *càk*, *cà?* が見つかった．[11] 本稿では, 石碑文が刻まれた 13 世紀末から 20 世紀後半までの約 700 年間を便宜的に(3)のように①から④の 4 つの時期に区分して，それぞれの時期における *càk*, *cà?* の使用例を分析する．

(3)　　タイ語石碑文コーパスの時代区分[12]：

①スコータイ王朝の時代（1292-1438 年），約 150 年間

②アユタヤ王朝とトンブリー王朝の時代（1438-1782 年），約 350 年間

---

[11] 石碑文という限られた談話ジャンルの中から，しかもたった 635 の用例しか収集できなかったので，本稿が提示する *càk*, *cà?* が生起する意味文脈の歴史的変化についての仮説は真に実証的とは言い難い．残存する通時的言語資料が限られている言語の歴史的研究には限界があり，その分析に高い実証性を求めることはできないことを認める．しかしタイ語研究の場合，通時的言語資料がまったく未整備であるというわけではなく，制作年が比較的はっきりした石碑文の読解が進んでいる．過去の実際の用例を可能な限り集めてその談話文脈を分析すれば，多少なりとも変化の傾向を観察することはできると考える．

[12] スコータイ王朝とアユタヤ王朝は並存した時期があり，1438 年に前者が後者に併合された．最古の石碑文が制作されたスコータイ王朝時代の 1292 年から 1438 年までを①の時期とし，1438 年からラタナコーシン王朝が興った 1782 年までを②の時期とした．アユタヤ王朝のすぐ後に興ったトンブリー王朝時代（1768 年から 1782 年まで）は独立させずに②の時期に含めた．

③ラタナコーシン王朝ラーマ 1 世～6 世の時代（1782-1925 年），約 150 年間
④ラタナコーシン王朝ラーマ 7 世～9 世の時代（1925-1978 年），約 50 年間

①から④のそれぞれの時期において *càk*, *cà?* がどのような意味文脈で生起しているのかを調べ，その結果を表 1 にまとめた.

表 1：石碑文における*càk*，*cà?* の生起傾向

| | ① スコータイ王朝 1292-1438 | | ② アユタヤ王朝とトンブリー王朝 1438-1782 | | ③ ラタナコーシン王朝 ラーマ1－6世 1782-1925 | | ④ ラタナコーシン王朝 ラーマ7－9世 1925-1978 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| <非意志的事態> | *50* | *38%* | *21* | *28%* | *73* | *53%* | *134* | *48%* |
| 譲歩仮定 | 6 | 5% | 1 | 1% | 11 | 8% | 6 | 2% |
| 推量（予測），一般化事態（必然，習慣），結論（反語） | 32 | 24% | 14 | 18% | 56 | 41% | 109 | 39% |
| 状況不可能，状況可能 | 0 | | 2 | 3% | 3 | 2% | 11 | 4% |
| 仮定（条件），切迫 | 12 | 9% | 4 | 5% | 3 | 2% | 8 | 3% |
| <意志的事態> | *77* | *59%* | *53* | *72%* | *64* | *47%* | *144* | *52%* |
| 妥当性，当為（許可，義務） | 0 | | 4 | 5% | 10 | 7% | 45 | 16% |
| 能力可能 | 0 | | 0 | | 0 | | 8 | 3% |
| 意志（決意，目的），願望 | 77 | 59% | 49 | 66% | 54 | 39% | 91 | 33% |
| 動詞 *càk* | 4 | 3% | 0 | | 0 | | 0 | |
| 合計 | 131 +15* | 100% | 74 | 100% | 137 | 100% | 278 | 100% |
| *càk* : *cà?* | 119 : 27 | | 44 : 30 | | 1 : 136 | | 4 : 274 | |

* ①の時代の石碑文に含まれる *càk*，*cà?* には，文章の欠損により分類不可能なものが 15 あった.

表 1 の横列, 最上段には *càk*, *cà?* の使用例を採集した石碑文の制作時期が示され, 縦列，左端の欄には *càk*，*cà?* が生起した意味文脈（非現実事態）の種類が列挙されている．それぞれの欄の数字は *càk*，*cà?* の使用例の数を示す．百分率（小数点以下四捨五入）は，それぞれの時期において，どの意味文脈での生起が多かったのかあるいは少なかったのか，その割合を示す．表 1 から次のことが読み取れる．(a) *càk* の動詞としての使用は①の時期までしか見られない；(b) ②の時期までは意志的事態の意味文脈で生起する割合が非意志的事態の意味文脈で生起する割合を上回っていた

が，③の時期以降，両者は拮抗している．

### 4.1　*càk*，*càʔ* が生起する意味文脈の種類

*càk*，*càʔ* が生起する意味文脈は，表 2 に示すように大きく 13 種類に分類できる．前節の図 1 に挙げられていた「意図」は，表 2 に含まれていない．石碑文コーパスには，命令，禁止，要請，勧告，奨励，賞賛など相手への働きかけの強い意図的な非現実事態を表す文脈での *càk*，*càʔ* の使用はなかった．

表 2：*càk*，*càʔ* が生起する意味文脈（非現実事態）の種類

| *意志的事態* | *非意志的事態* |
|---|---|
| | 譲歩仮定 |
| 妥当性，当為（許可，義務） | 推量（予測），一般化事態（必然，習慣），結論（打消し反語，疑念反語） |
| 能力可能 | 状況不可能，状況可能 |
| 意志（決意，目的），願望 | 仮定（条件），切迫 |

以下に，それぞれの種類の非現実事態表現の具体例を挙げる．[13]

#### 4.1.1　譲歩仮定

「譲歩仮定」はすべての時期で比較的低い割合ながら見られる．①の時期から ‘たとえ～であろうと，～であったとしても’ という「譲歩仮定」の意味に特化した接続詞があった．

(4)　*sɯɯ*　*càk*　*náp*　*kɔ̂ɔ lɛɛ*　*mîʔ*　*thûan*
　　even if　count　CONJUNCTION　NEGATIVE　fully
　　「たとえ数えても，数えきれない．」（5）

#### 4.1.2　推量（予測）

「推量」はどの時期にも見られるが，③の時期に比較的割合が高くなった．

(5)　*càʔ*　*pay*　*sùu*　*ʔabaayyathúk*　*sǐa*　*plàaw*
　　go　towards the way to hell　PERFECTIVE　uselessly

[13] 『石碑文集』から拾った用例である．原文の文字の音価に関する知識がないため，原文に添えられていた現代タイ語の綴りに変換された文章の表記を採用した．英語の逐語訳および表現全体の日本語訳は筆者による．日本語訳に添えた括弧の数字は，その用例の出所である石碑の登録番号を示す．

「無駄に破滅への道を歩んでしまうだろう.」（91）

### 4.1.3　一般化事態（必然，習慣）

「一般化事態」はどの時期にも見られるが，③の時期に急に割合が増えた．主語が特定できる人や物ではなく不特定なものであるときに，‘我々が一般的に見聞きすることから予想し得るごとく～であるものだ’ という「一般化事態」の読みになる．

(6)　*sǎŋkèet*　*weelaa phráʔsǒŋ*　*càʔ*　*loŋ*　*sùat*　*mon*
notice　time　monk　go down　recite　prayer
*nay*　*bòot*
in　temple
「僧侶が本堂で読経しに（僧房から）下りてくる時間に気づく.」（190）

### 4.1.4　結論（反語）

‘～であろうか（否，そんな訳はない）’ という「反語」は③の時期から見られる．(7) のような「打消し反語」は③の時期から見られ，(8) のような「疑念反語」は④の時期から見られる．

(7)　*chây* [14]　*càʔ*　*níyom*　*yindii*　*lûam sǎy*　*látthíʔ*
favor　be glad　believe in　ideology faith
*sàatsanǎa*　*ʔɯ̀ɯn*　*nɔ̂ɔk càak*　*phráʔphútthasàatsanǎa*　*nán*
religion　other　besides　Buddhism　that
*hǎa míʔ dây*
not possible at all
「仏教以外の宗教を喜んで信仰することはあり得ない.」（187）

(8)　*càʔ*　*hǎa*　*mít*　*mɯ̌an*　*phɯ̂an*　*thîi nǎy*　*dây*
seek　friend　be like　companion　where　POSSIBLE
「どこで相棒（石碑制作者が失った友）のような友人を見つけられるという

---

[14] *chây* は現代タイ語では ‘そうだ，その通りである’ という意味を表すが，昔は名詞句の前に生起してその名詞句が表す物事を否定する機能を持った否定辞だったと言われている．③の時期以降に *chây* を含む慣用表現が発達し，それとともに *chây* の語義が変化していったのではないかと考えられるが，その意味変化の具体的な過程は明らかにされていない．③の時期に *chây* が単独でどのような意味を表していたのかはよくわからないが，本稿では「*chây*＋*càʔ*＋動詞句，*hǎa míʔ dây*」という形式を固定化された慣用表現とみなし，この形式全体で ‘～はあり得ない’ という「打消し反語」の意味を表していたと考える．

のか.（どこであろうと見つけられやしない.）」（278）

### 4.1.5　状況可能（状況不可能）

「状況可能」は②の時期から見られる．まず (9) のような「状況不可能」が②の時期から見られるようになり，さらに (10) のような「状況可能」が③の時期から見られるようになった.

(9)　*cà?*　*phannanaa*　*bɔ̀ɔ mî?*　*dây*
describe　NEGATIVE　POSSIBLE
「描写し得ない（筆舌に尽くし得ない）.」（86）

(10)　*mây*　*mii*　*pratuu*　*thîi*　*cà?*　*?ɔ̀ɔk*
NEGATIVE　there is　door　RELATIVIZER　exit
*pay*　*phaay nɔ̂ɔk*　*dây*
go　outside　POSSIBLE
「外に出られる扉がない.」（146）

### 4.1.6　仮定（条件）

「仮定」はどの時期にも見られるが，割合はあまり高くない．①の時期から ‘もし～すれば（～であれば）’ という「仮定」の意味を表す接続詞があった.

(11)　*phǐ?*　*càk*　*náp*　*dûay*　*dɯan*
if　count　with　month
*dây*　*yìp mɯ̀ɯn sǐi phan hòk sǐp*　*dɯan*
emerge　24,060　month
「もし月で数えれば，24,060 ヶ月になる.」（3）

### 4.1.7　切迫

‘今にも～そうだ’ という「切迫」は①の時期にだけ見られる．[15]

(12)　*mɯaŋ*　*sùkhǒothay*　*nîi*　*mii*　*dàŋ*　*càk*　*tɛ̀ɛk*
city　Sukhothai　this　there is　noisy　be broken
「このスコータイ市街は，うるさくて今にも壊れそうだ.」（1）

[15] 注 16 を参照せよ.

### 4.1.8　妥当性

「妥当性」は②の時期から見られるようになり，割合は徐々に高くなった．①の時期には *càk*，*càʔ* を伴わない「*phɯŋ*＋好ましい事態を表す動詞句 ‘～する（～である）のが好ましい，適切だ’」という形式があった．②の時期以降，「*khuan* ‘適当だ，～べきだ’」という語を含む形式が使われることが増え，非現実性の標示を受ける頻度が増えた．

(13)　*khuan*　*càʔ*　*pen*　*thîi*　*chûɯn chom*　*yindii*
should　COPULA　thing　love　be glad
「愛され喜ばれるところのものであるはずだ.」（178）

### 4.1.9　当為（許可，義務）

「当為」は③の時期から見られる．(14) のような「許可」は③の時期から見られ，(15) のような「義務」は④の時期から見られる．

(14)　*càʔ*　*chák*　*tɛ̀ɛ*　*bay*　*yày*　*mŭan*　*wan*
draw　only　CLASSIFIER　big　be like　day
*thamasawaná?*　*tháŋ*　*weelaa*　*cháw*　*khâm*
the hearing of a sermon　both　time　morning　evening
*kɔ̂ɔ*　*dây*
CONJUNCTION　POSSIBLE
「朝夕とも仏日のように大きなほうだけ引っ張ってもよい.」（190）

(15)　*phûu*　*thîi*　*tham*　*chûa*　*càʔ*　*tɔ̂ŋ*　*ráp*　*khúk*
person　RELATIVIZER　do　bad　must　receive　sorrow
*sûŋ*　*pen*　*phŏn*　*khɔ̌ɔŋ*　*khwaam chûa*
RELATIVIZER　COPULA　result　of　vice
「悪いことをする人は悪の結果の苦しみを受けなければならない.」（256）

### 4.1.10　能力可能

「能力可能」は④の時期から見られる．

(16)　*ʔàat sǎamâat*　*càʔ*　*ʔathîthǎan*　*dûay*　*khaathǎa*
be able　pray　with　Pali verse

| | | | |
|---|---|---|---|
| *bòt day bòt nɯ̀ŋ* | *hây* | *khróp* | *dây* |
| a certain paragraph | CAUSATIVE | fully | POSSIBLE |

「パーリ語経文のある節すべてを使って祈願することができる.」（257）

### 4.1.11　意志（決意，目的）

「意志」はどの時期も割合が高い．②の時期までは特に割合が高かった．③の時期以降，徐々に割合が低くなっている．

(17)

| | | | |
|---|---|---|---|
| *phɯ̂a* | *càʔ* | *hây* | *ʔaanaaprachaarâatsàdɔɔn* |
| in order to | | CAUSATIVE | the people |
| *tháŋ puaŋ* | *chom* | | *lên* |
| in general | look at with admiration | | play |

「すべての人々に観賞させるように…」（187）

### 4.1.12　願望

「願望」はどの時期にも見られる．②の時期までは「願望」の割合は「意志」の割合に次いで第 2 位だったが，③の時期以降，かなり低くなった．

(18)

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| *mii* | *sàtthaa* | *càʔ* | *khrây* | *sâaŋ* | *ʔaaraam* |
| have | faith | | desire | build | temple |

「信心を持ち、寺を建てたいと望む.」（86）

## 4.2　*càk*，*càʔ* が生起する意味文脈の範囲の変遷

第 3 節で提示した図 1 をもとにして，下の図 2～図 5 の意味地図を作成した．図 2～図 5 は，それぞれ，①から④の各時期に認められた *càk*，*càʔ* が生起する意味文脈（非現実事態）の種類と，その当該文脈で *càk*，*càʔ* が生起した割合を示している．

| | | |
|---|---|---|
| *主観的*<br>↑<br>↓<br>*客観的* | 意志 38%，願望 21% | 譲歩仮定 5%<br>推量 11%, 一般化事態 14%<br>仮定 8%, 切迫 2% |
| | *意志的* | *非意志的* |

図 2：①の時期に *càk*，*càʔ* が生起した意味文脈の種類

図 2 から，①の時期には「意志」,「願望」の割合が高かったことがわかる．この時期からすでに，非意志的かつ（間）主観的な事態である「譲歩仮定」,「推量」,「一般化事態」の割合がかなり高いことは注目に値する．主観性の程度が「推量」,「一般化事態」と同じ意志的な事態の「妥当性」,「当為」はまだこの時期には見られない．

| | | |
|---|---|---|
| *主観的*<br>↑<br>↓<br>*客観的* | 妥当性 5%<br><br>意志 54%，願望 12% | 譲歩仮定 1%<br>推量 9%, 一般化事態 9%<br>状況不可能 3%<br>仮定 5% |
| | *意志的* | *非意志的* |

図 3：②の時期に *càk*，*cà?* が生起した意味文脈の種類

図 2 と図 3 を比べると，②の時期から「妥当性」と「状況不可能」が見られるようになったことがわかる．①の時期にすでに第 1 位だった「意志」の割合が，②の時期になってさらに全体の約半分にまで増えた．その分，意志的事態の「願望」と非意志的事態の「譲歩仮定」,「一般化事態」,「仮定」の割合は減った．①の時期に見られた「切迫」が②の時期以降に見られないのは，本稿が調査した言語資料が石碑文だったことに起因するのかもしれない．石碑文という談話ジャンルでは ‘今にも～そうだ’ という臨場感に溢れた非現実事態が描写されることが少ないからかもしれない．実際のところ，現代タイ語でも「切迫」文脈で *cà?* の使用が認められる．[16]

| | | |
|---|---|---|
| *主観的*<br>↑<br>↓<br>*客観的* | 妥当性 7%，許可 1%<br><br>意志 31%，願望 7% | 譲歩仮定 8%<br>推量 13%, 一般化事態 24%, 打消し反語 2%<br>状況不可能 1%, 状況可能 1%<br>仮定 2% |
| | *意志的* | *非意志的* |

図 4：③の時期に *càk*，*cà?* が生起した意味文脈の種類

図 3 と図 4 を比べると，③の時期から「許可（当為）」,「打消し反語（結論）」,「状況可能」が見られるようになったことがわかる．②の時期に急増した「意志」の割合は，③の時期になると大きく減った．「願望」,「仮定」の割合も引き続き減った．一

[16] 現代タイ語には「切迫」を表す *cà?* を含む複合形式が数多く存在し，特に口語でよく使われる（Takahashi 2002）．それらの表現は慣用句化しており，特に *kamlaŋ cà?* は常にひとつの単位としてふるまい，完全に語彙化していると言える．

方,「妥当性」,「譲歩仮定」,「推量」,「一般化事態」の割合は増えた．特に「一般化事態」の割合が急増し,「意志」の割合に次いで第 2 位になった．

| | | |
|---|---|---|
| *主観的*<br>↑<br>↓<br>*客観的* | 妥当性 14%，許可 1%，義務 1%<br>能力可能 3%<br>意志 24%，願望 8% | 譲歩仮定 2%<br>推量 14%, 一般化事態 24%, 疑念反語 1%<br>状況不可能 2%, 状況可能 2%<br>仮定 3% |
| | *意志的* | *非意志的* |

図 5：④の時期に *càk*，*cà?* が生起した意味文脈の種類

図 4 と図 5 を比べると，④の時期から「義務（当為）」,「疑念反語（結論）」,「能力可能」が見られるようになったことがわかる．④の時期になってようやく表 2 に挙げた 13 類の非現実事態がすべて揃ったことになる．「意志」,「譲歩仮定」の割合が顕著に減り,「妥当性」の割合が顕著に増えた．

## 5　考察

Diller 2001 は *cà?* の文法化経路について仮説を提示している．*cà?* を未来時制および非現実性のマーカーとみなす Diller は，Bybee et al. 1991 が主張する英語の未来時制マーカー ‘will’ の文法化経路（図 6）になぞらえ，*cà?* の歴史的意味変化の方向性を図 7 のように想定する．

| | | | |
|---|---|---|---|
| desire | > intention | > future | > probability, imperative |
| 願望 | 意図（意志） | 未来 | 蓋然性，命令 |

図 6：Bybee et al. 1991 が想定する ‘will’ の文法化経路

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| desire | > intention | > future | > irrealis | > (irrealis-complement formative[17]) |
| 願望 | 意図（意志） | 未来 | 非現実性 | （非現実性補語の形成素） |

図 7：Diller 2001 が想定する *cà?* の文法化経路

図 7 には「願望」,「意図（本稿では「意志」）[18]」という意志的事態と「未来（本稿では「推量」）」という非意志的事態が含まれている．「願望」,「意図（意志）」は命題事象志向の事態であり,「未来（推量）」はより主観的な，話し手志向の事態である．

[17] 第 2 節の (2) に具体例が挙がっている．

[18] Bybee et al. 1991 と Diller 2001 の「意図 intention」という用語は，本稿の「意志 volition」に近い，より命題事象寄りのより客観的な概念を表していると思われる．

図 7 の最初の「願望」から「意図（意志）」へという変化には，意志性および主観性に大きな変化は見られない．次の「意図（意志）」から「未来（推量）」へという変化は,「意志的事態から非意志的事態へ」という変化であると同時に「客観的事態から主観的事態へ」という変化でもある．この変化は「より客観的な意味からより主観的な意味へ，より話し手の推論や信念に基づいた意味へ」という意味変化の一方向性の仮説（‘from propositional to textual and expressive meanings’ Traugott 1892; ‘unidirectionality of meaning change’ Traugott 1995; ‘subjectification’ Traugott 1989）に合致している．さらに「未来（推量）」から「非現実性」へという変化が続く.「非現実性」の定義に関して Diller は詳しい説明を加えていないのではっきりしたことはわからないが，すべての非現実事態と親和性を持つ抽象度の高い概念として「非現実性」を考えているのではないかと思われる．しかし *cà?* が具体的にどのような非現実事態の表現で使われるのかについて何も解説がないため,「未来（推量）」より先，さらに対人的，発話行為的な意味（間主観的な意味）へ変化したと Diller が考えているのかどうか，図 7 からだけでは判断できない.

*càk* という動詞がもともと「願望」の意味を表していたのかどうか，本稿の調査ではわからなかった．*càk* の動詞としての使用例を十分に収集することができず，考察することができなかったからである．①の時期に *càk*, *cà?* が「意志」文脈と「願望」文脈で生起する割合が高かったのはもともと *càk* が意志や願望を表す動詞であったからであると考えることもできよう．しかし非意志的な「切迫」文脈も低率ながら①の時期に見られる．その他,「状況可能」文脈を除くさまざまな非意志的な文脈が①の時期からすでに見られる．したがって，*càk* が非意志的な動きや状態を表す動詞あるいは名詞であった可能性がまったくないとは言い切れないだろう.

ひとつはっきりしていることは，①の時期から④の時期にかけて，*càk*, *cà?* が何らかの特定的なひとつの意味とだけ結びついていた時期はなかったということである．先に紹介した Diller の仮説（図 7）は以下のように解釈することができるだろう．もともと動詞として「意図（意志）」を表していた *càk* が，専ら「未来（推量）」を表す機能語になり，次第に音形が cà? に変化し，さらに非現実性一般を表す機能語になって，非現実性補語の形成素としてもよく使われるようになった．もしこの仮説が正しいとすれば，*càk*, *cà?* が専ら「未来（推量）」を表す機能語であった時期は，本稿が調査対象とした①の時期（13 世紀末から 15 世紀半ば）より早い時期でなければならない．なぜなら，①の時期には図 2 が示すとおり非現実事態の意味地図の左下方（意志的・客観的事態），右下方（非意志的・客観的事態），右上方（非意志的・主観的事態）に *càk*, *cà?* が生起しうる意味文脈の種類が広がっており，それ以降の時期も図 3～図 5 が示すとおり常に図のほぼ全域にその種類が広がっている．Diller が提示した「願望 ＞ 意図（意志）＞ 未来（推量）＞ 非現実性」という *cà?* の文法

化経路を検証するには，①の時期より前の時代の言語資料がなくてはならないということになる．①の時期以降の言語資料しか扱うことができない本稿では，*càk*，*cà?* が非現実性を表す機能語（非現実性マーカー）になった後の 13 世紀末以降にどのような意味文脈で *càk*，*cà?* が生起してきたのかを検討することしかできない．

図 2～図 5 から読み取れることは，*càk*，*cà?* の意味変化（さらなる文法化）ではなく，むしろタイ語のモダリティ概念（非現実事態）体系の変遷であると考えるべきだろう．*càk*，*cà?* が非現実性マーカーとして機能するようになってから *càk*，*cà?* が表す意味が変化したとすれば，意味変化の一方向性の仮説に従うと，何らかの発話行為レベルの概念を標示するマーカーになるしかない．しかし図5からもわかるように，*càk*，*cà?* が発話行為レベルの概念（「意図」や「譲歩仮定」）の標示に特化したマーカーになったとはまだ言えない．では *càk*，*cà?* が生起する意味文脈の範囲に変化が起こったのはなぜかと考えてみると，それはタイ語のモダリティ概念（非現実性マーカーと親和性を持つ概念，すなわち非現実事態とみなされる概念）の体系内部に変化が起こったからであると言えるのではないだろうか．曖昧で未分化だったモダリティ概念が，徐々に特定化され分化していったことが，図 2 から図 3 へ，図 3 から図 4 へ，図 4 から図 5 へと移行するにつれ特定できる非現実事態の種類がだんだん増えていることに反映されていると考えてよいだろう．本稿では，そうしたタイ語モダリティ概念の「分化パタン」（より特定的な意味へという意味変化の方向性を重視するのであれば「特定化パタン」と呼んでもよい）について考察を試みる．

まず，前節で分析した *càk*，*cà?* が生起する意味文脈に関する変化の全体像を整理し，論点を明確にしたい．その要点は (19)，(20) のようにまとめられる．

(19)　②の時期あるいは③の時期から *càk*，*cà?* による非現実性の標示を受ける頻度が徐々に減少した非現実事態の種類がある．それは，「意志」と「願望」である．一方，②の時期から *càk*，*cà?* による非現実性の標示を受ける頻度が徐々に増加した，あるいは急増した非現実事態の種類がある．それは，「妥当性」，「推量」，「一般化事態」である．

(20)　②の時期から④の時期のいずれかの時期に非現実性マーカー *càk*，*cà?* による非現実性の標示を受け始め，新たに非現実性の属性を持つ意味文脈（非現実事態）のひとつと認められるようになった種類がある．それは，「妥当性」，「当為（許可，義務）」，「結論（打消し反語，疑念反語）」，「状況不可能」，「状況可能」，「能力可能」である．

以下の小節でこれらの点について論じていく．

### 5.1　非現実性の標示を受ける頻度が減少した種類と増加した種類

*càk*，*cà?* によって非現実性の標示を受ける頻度が減った「意志」と「願望」は主観性の程度が低い非現実事態であり, 非現実性の標示を受ける頻度が増えた「妥当性」,「推量」,「一般化事態」は主観性の程度が高い非現実事態である．また，非現実性の標示を受ける頻度が増えた非現実事態の種類のひとつ,「妥当性」は，本稿が調査した①の時期以降に非現実事態の種類として認識されるようになった新たな種類である．こうしたことから，古くは，より客観的な非現実事態の表現によく使われていた *càk*，*cà?* が，時代が下るにつれ，より主観的な非現実事態の表現によく使われるようになったのだろうと推測できる．言い換えれば，タイ語の非現実性マーカーはより主観的な非現実事態を標示するマーカーとして特化する傾向にある．

### 5.2　新たに非現実事態として認識された種類

「妥当性」,「当為（許可, 義務）」,「結論（打消し反語, 疑念反語）」,「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」という非現実事態の種類がひとつの確固たる非現実事態の種類として認識されるようになった（それらの概念がそれらの概念を包摂していた, より一般的，より非特定的な概念から分化した）のは,「妥当性」と「状況不可能」が②の時期,「許可」と「打消し反語」と「状況可能」が③の時期,「義務」と「疑念反語」と「能力可能」が④の時期である．新たな種類として認識されるようになった時期（他の概念から分化した時期）が近いもの同士がお互い意味的にも近いもの同士であると単純に考えることはできない．しかし，意味的に隣接関係にあることがはっきりしている複数の概念の派生関係を探るときには，それぞれの分化時期が重要な分析要素となる．そこでまず，分化時期がわかっているこれらの非現実事態に絞って，その相互の意味の近さや遠さはどうであるかを確認し，もし意味的に隣接したものがあれば，可能性としてのそれらのモダリティ概念の派生関係，分化の方向性を考えてみたい．

図 1 の「非現実事態の意味地図」上でその位置関係を見ると，(a)「妥当性」と「当為（許可，義務）」が同じ位置にあり，(b)「妥当性」,「当為（許可，義務）」と「結論（打消し反語，疑念反語）」が左右に隣接し，(c)「能力可能」と「状況不可能」,「状況可能」が左右に隣接し，(d)「妥当性」,「当為（許可，義務）」と「能力可能」が上下に隣接し，(e) 「結論（打消し反語，疑念反語）」と「状況不可能」,「状況可能」が上下に隣接している．すべて派生関係の可能性があるということになる．

それぞれの分化時期の差を見ると，表 3 に挙げたように，(a) では「②妥当性→③許可→④義務」，(b) では「②妥当性→③許可，打消し反語→④義務」，(c) では「②状況不可能→③状況可能→④能力可能」，(d) では「②妥当性→③許可→④義務，能力可

能」，(e) では「②状況不可能→③状況可能，打消し反語→④疑念反語」という分化の順番になる．

表 3：②の時期以降に分化した非現実事態の種類（妥当性，許可，義務，打消し反語，疑念反語，状況不可能，状況可能，能力可能）の派生関係の可能性

| 分化時期： | ②の時期 | ③の時期 | ④の時期 |
|---|---|---|---|
| (a) | 妥当性→ | 許可→ | 義務 |
| (b) | 妥当性→ | 許可，打消し反語→ | 義務，疑念反語 |
| (c) | 状況不可能→ | 状況可能→ | 能力可能 |
| (d) | 妥当性→ | 許可→ | 義務，能力可能 |
| (e) | 状況不可能→ | 状況可能，打消し反語→ | 疑念反語 |

しかし (d) の派生関係には問題がある．主観性の度合いの高い「妥当性」,「許可」,「義務」から主観性の度合いの低い「能力可能」が派生することは,「客観的な意味から主観的な意味へ」という意味変化の一方向性の仮説に合致しないからだ．したがって「能力可能」を導いた派生関係は (d) よりも (c) のほうがもっともらしいといえる．また,「打消し反語」を導いた派生関係は (b) よりも (e) のほうがもっともらしい．なぜなら,「打消し反語」表現には「状況不可能」表現に使われる「動詞＋否定辞＋*dây*」という語句が含まれており,「状況不可能」から「打消し反語」が派生したと考えるのが自然だからである．「疑念反語」を導いた派生関係も (b) よりも (e) のほうがもっともらしい．なぜなら,「疑念反語」表現には「状況可能」表現に使われる *dây* という語が含まれており,「状況可能」から「疑念反語」が派生したと考えるのが自然だからである．

表 3 に可能性として挙げた派生関係の中でもっともらしいと認められるものだけを取り出し，改めて表 4 にその分化パタンを掲げる．

表 4：予想分化パタン

| 分化時期： | ②の時期 | ③の時期 | ④の時期 |
|---|---|---|---|
| | 妥当性→ | 許可→ | 義務 |
| | 状況不可能→ | 状況可能→ | 能力可能，疑念反語 |
| | 状況不可能→ | 打消し反語 | |

以下では，表 4 に挙げた 3 つの予想分化パタンを出発点として，それら 3 つの分化パタンに関連する分化について論じる．

### 5.2.1　「妥当性→許可→義務」という予想分化パタンの周辺

「妥当性」と「当為（許可，義務）」はどちらも意志的事態に分類され，主観性の度合いも同程度である．②の時期に「妥当性」が見られるようになった後，③の時期に「許可」が見られ，さらに④の時期に「義務」が見られるようになった．こうしたことから，②の時期に新たな非現実事態の種類として認識されるようになった「妥当性」は②の時期にはまだ「許可」,「義務」といった概念を包含する非特定的で曖昧な概念だったのだが，その後徐々に「許可」,「義務」がはっきりと識別されるようになった，と考えることができないわけではない．だが,「許可」,「義務」という概念はそれぞれかなり性質を異にする概念であり、それぞれ個別に分化パタンを考えるべきだろう．

分化パタンを考えるにあたって，当時それぞれの概念がどのような形式で表されていたのかをまず調べる．石碑文の中で使われていた「妥当性」,「許可」,「義務」を表す形式は以下のとおりであった．[19]

(21)　「妥当性」を表す形式：

a.　*phɯŋ*＋好ましい事態を表す動詞句 ‘～する（～である）のが好ましい，適切だ，～する（～である）のは相応しい，～すべきだ（～であるべきだ）’

b.　②　*hàak*＋*càʔ*＋好ましい事態を表す動詞句 ‘～する（～である）のは相応しい，～すべき（であるべき）だ’

c.　②　（*sǒm*）*khuan*（＋与格名詞句）＋*càʔ*＋好ましい事態を表す動詞句 ‘～する（～である）のは（～にとって）相応しい，～すべき（であるべき）だ’

d.　②　（*sǒm*）*khuan*＋{*ʔan*/*thîi*}＋*càʔ*＋好ましい事態を表す動詞句 ‘～する（～である）のは相応しい，～すべき（であるべき）だ’

e.　④　*khuan*＋*càʔ*＋好ましい事態を表す動詞句＋*dây* ‘～し得る（～であり得る）のは相応しい，～し得る（～であり得る）べきだ’

f.　④　*càʔ*＋*phɯŋ*＋好ましい事態を表す動詞句 ‘～する（～である）のは相応しい，～すべきだ（～であるべきだ）’

(22)　「許可」を表す形式：

[19] 具体例は第 4.1 節を参照せよ．各形式の前に付けられている円内の数字は表 1 の時代区分に対応し，石碑文でその形式が使われるようになった時期を示す．数字が付されていない形式は①の時期以前から使われていた形式である．

③　*càʔ*＋非拘束的事態を表す動詞句＋(*kɔ̂ɔ*) *dây*　‘～して（も）よい，～であって（も）よい’

(23)　「義務」を表す形式：

④　（*cam*＋）*càʔ*＋*tɔ̂ŋ*＋拘束的事態を表す動詞句 ‘～しなければ（～でなければ）ならない’

形式の類似性は派生関係の可能性があることを示唆する．そこで次に，それぞれの非現実事態を表す形式間の類似性を調べていく．

**5.2.1.1　「義務」**

形式に着目してみると，「義務」を表す形式 (23) は，「切迫」を表す形式 (24)，「推量」を表す形式 (25a)，「一般化事態」を表す形式 (26a) に似ている．

(24)　「切迫」を表す形式：

*càʔ*＋非意志的事態を表す動詞句 ‘今にも～そうだ’

(25)　「推量」を表す形式：

a.　*càʔ*＋非意志的事態を表す動詞句 ‘～だろう’

b.　③　思考を表す動詞（＋*wâa*）＋*càʔ*＋動詞句 ‘～だろうと思う’

c.　④　*koŋ*＋*càʔ*＋動詞句 ‘きっと～だろう’

d.　④　*ʔàat*＋*càʔ*＋動詞句 ‘もしかしたら～かもしれない’

(26)　「一般化事態」を表す形式：

a.　*yɔ̂ɔm*＋*càʔ*＋好ましくない事態を表す動詞句 ‘必然的に～する（～になる），～せざる（～にならざる）を得ない’

b.　②　*càʔ*＋*dây*＋期待された事態を表す動詞句 ‘必然的に～（期待された結果）になる’

「義務」を表す形式 (23) と「切迫」を表す形式 (24) や「推量」を表す形式 (25a) は *càʔ* の後ろの動詞句が非意志的事態を表すところが似ている．また，「義務」を表す形式 (23) と「一般化事態」を表す形式 (26a) は *càʔ* の後ろの動詞句が好ましくない事態を表すところが似ている．「義務」を表す形式 (23) に含まれる *tɔ̂ŋ* という動詞は，ไพทยา มีสัตย์ phaythayaa miisàt 1997 によると，もともと ‘～にちょうど相当する，～にぴったり適合する，～に当たる，～に触れる’ という意味を表し，‘～に当た

る，～に触れる’という意味では，非意志的で且つ好ましくない事態（影響を被ること）を表す場合が多いという．そこから,「(外的拘束を背景にして）必然的に～しなければ（～でなければ）ならない」という拘束的必然性（義務）の意味が派生したのではないかと推測する．[20] しかし本稿の分析資料からは数例しか「義務」表現の用例を採集することができず，派生関係の確定には至らなかった.

#### 5.2.1.2　「妥当性」

(21b-f) に挙げた「妥当性」を表す形式の派生関係についてもよくわからなかった.「妥当性」を表す形式は，意志的なモダリティ概念である「意志」や「願望」を表す形式 (27), (28) にも似ているし，非意志的なモダリティ概念である「一般化事態」を表す形式 (26a) にも似ている.

(27)　「意志」を表す形式：

a.　*càʔ*＋意志的事態を表す動詞句 ‘～しよう’

b.　③　評価や意欲を表す動詞＋*thɨ̃i*＋*càʔ*＋動詞句 ‘～しようとするのは～だ，～しようという意欲を持つ’

(28)　「願望」を表す形式：

a.　*càʔ*＋願望を表す動詞句 ‘～したい，～でありたい’

b.　③　願望を表す動詞＋*càʔ*＋動詞句 ‘～する（～である）のを望む’

「意志」,「願望」,「妥当性」という 3 つの意志的なモダリティ概念を表す形式には，欲して止まない事態，意欲的に取り組む事態，意欲的に取り組むべき望ましい事態といったある個人のはっきりした意志性・希求性が関与する事態を表す動詞句が *càʔ* の後に続くという共通点がある.「妥当性」というモダリティ概念が「意志」あるいは「願望」というモダリティ概念から分化した可能性もあり得なくはない.

だが,「一般化事態」を表す形式 (26a) も「妥当性」を表す形式 (21b, c) によく似ている．それぞれの形式に含まれる動詞句が表す事態の好ましさという点において両者は正反対だが，必然性や適切性を表す *yɔ̂ɔm*，*hàak*，*khuan* といった語が *càʔ* の

---

[20] 現代タイ語の「*tôŋ*＋動詞句」という形式は，拘束的必然性（義務）の他,「(内的知識を背景にして）必然的に～する（～である）にちがいない」という認識的必然性（結論）の意味も表す．ไพทยา มีสัตย์ phaythayaa miisàt 1997 は，ラーマ 1 世の時代とラーマ 4 世の時代（いずれも本稿の②の時期）の公文書に *tôŋ* の義務的モダリティ用法と認識的モダリティ用法がそれぞれ見られると指摘している．しかし本稿が扱った石碑文コーパスには *càʔ* を含む「*càʔ*＋*tôŋ*＋動詞句」という形式が認識的モダリティを表す例はなかった.

直前に位置しているという点において両者は似ている. 非意志的な必然を表す *yɔ̂ɔm* が，願望や意志が関わる適切さを表す *hàak*，*khuan* に取って代わられ,「妥当性」を表す表現が生まれたという可能性もあり得なくはない．①の時期より前から存在していた「一般化事態」を表す形式 (26a) が，②の時期から見られる「妥当性」を表す形式 (21b, c, d) の出現を動機付け，さらにその「妥当性」を表す形式が③の時期に定着し,「意志」を表す新しい形式 (27b) と「願望」を表す新しい形式 (28b) の出現を動機付けた．このような推論も可能だ．しかし本稿の分析資料からこの推論の正当性を証明するに足る証拠を見出すことはできなかった.

#### 5.2.1.3　その他

「妥当性」を表す形式 (21e),「許可」を表す形式 (22),「一般化事態」を表す形式 (26b) ,「打消し反語」を表す形式 (29a),「疑念反語」を表す形式 (29b) は，いずれも *dây* という語を含み，(30) に挙げた「状況不可能」を表す形式あるいは (31) に挙げた「状況可能」を表す形式に似ている.

(29)　「反語」を表す形式：

a.　③　*chây*＋*cà?*＋動詞句，*hǎa mí? dây* ‘～することは（～であることは）あり得ない’（打消し反語）

b.　④　疑問詞，強意を表す小辞，*dây* などの組み合わせ ‘どこで～があり得るというのか’（疑念反語）

(30)　「状況不可能」を表す形式：

②　*cà?*＋動詞句＋否定辞＋*dây* ‘状況的に～が不可能だ’

(31)　「状況可能」を表す形式：

③　*cà?*＋動詞句＋*dây* ‘状況的に～が可能だ’

「状況不可能」や「状況可能」と関連があると考えられるモダリティ概念の分化パタンについては，常に *dây* を含む形式で表されるわけではない「妥当性」と「一般化事態」の分化パタンを除き，次節で考察する.

以上，第 5.2.1 節では「妥当性→許可→義務」という予想分化パタンについて考察した．しかし石碑文コーパスから集められた限られた数の用例だけではそうした分化パタンを立証するのは難しいことがわかった.

### 5.2.2　「状況不可能→状況可能→能力可能，疑念反語」という予想分化パタンの周辺

「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」,「疑念反語」はいずれも *dây* を含む形式で表される.「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」は「疑念反語」よりやや主観性の程度が低い.「状況不可能」,「状況可能」,「疑念反語」は非意志的事態で,「能力可能」は意志的事態である. ②の時期に「状況不可能」が見られるようになった後, ③の時期に「状況可能」が見られるようになり, ④の時期に「能力可能」,「疑念反語」が見られるようになった. これらのことから, ④の時期より前は「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」,「疑念反語」が未分化だったのが, ③の時期になって「状況可能」が分化し, ④の時期になって「能力可能」,「疑念反語」が分化した, と考えることは不可能ではない. 特に「疑念反語」という概念は「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」より主観性の程度が高い. また, 前節の最後で言及した, やはり *dây* を含む形式で表される「許可」,「打消し反語」も,「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」より主観性の程度が高い. したがって, それらの概念の分化時期が「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」の分化時期より遅ければ,「状況不可能」,「状況可能」,「能力可能」からそれらの概念が分化した, と考えることも不可能ではない.

#### 5.2.2.1　「能力可能」

(32) に挙げた「能力可能」を表す形式は,「状況可能」を表す形式 (31) に似ている.「状況可能」の形式の *cà?* の前に（*?àat*）*săamâat* という語を添えると「能力可能」の形式になる.

(32)　「能力可能」を表す形式：
　④　（*?àat*）*săamâat*＋*cà?*＋動詞句（＋*dây*）‘（能力的に）～できる’

高橋・新里 2005 によると, タイ語における「可能」というモダリティ概念の分化パタンは (33) の通りである. 表 4 に挙げた本稿の予想分化パタン（「状況不可能→状況可能→能力可能」）は (33) の分化パタンに一致する。

(33)　「可能」の分化パタン（高橋・新里 2005）：
出現→「状況不可能」→「状況可能」→「能力可能」

高橋・新里 2005 の仮説を要約すると以下の通りである. 可能表現に使われるタイ語の *dây* という語はもともと自然発生的な出現事象（特に嵩や時間などの数量概念の出現）を表す出現動詞だった. ①の時期と②の時期に刻まれた石碑文には「*dây*＋数量名詞句 ‘ある数量が生じる, ある数量に達する’」という形式が多数使われ,「*dây*＋モノ名詞句＋与格前置詞＋人名詞句 ‘あるモノがある人に生じる（＞そのモノがそ

の人のモノになる）’」という形式も見られることがその証拠である．また，①の時期と②の時期には「動詞句＋*dây*」という「状況可能」を表す形式より，「動詞句＋否定辞＋*dây*」という「状況不可能（状況が許さず，当該事態が出現し得ない）」を表す形式のほうが出現頻度が高かった．否定辞を含む「動詞句＋否定辞＋*dây*」という「状況不可能」を表す形式が定着した後，「動詞句＋*dây*」という肯定形で「状況可能（状況が許し，当該事態が出現し得る）」が表されるようになった．*dây* は現在でもその語義として「能力可能（人間の能力によって当該事態が出現し得る）」の意味を明示的に表すことはないが，動作主の能力が問題となる文脈では「能力可能」を表していると解釈される．

この高橋・新里 2005 の仮説に従えば，タイ語の *dây* を使った可能表現の源は「状況不可能」という非現実事態だったということになる．その「状況不可能」から「状況可能」が分化し，さらに「状況可能」から「能力可能」が分化した．

表 5 に「状況不可能」，「状況可能」，「能力可能」という 3 つの「可能」概念が関わる分化パタンの仮説を示す．

表 5：「状況不可能」，「状況可能」，「能力可能」の分化パタン

| 分化時期： | ②の時期 | ③の時期 | ④の時期 |
|---|---|---|---|
| | 状況不可能→ | 状況可能 | |
| | | 状況可能→ | 能力可能 |

**5.2.2.2　「許可」，「反語」**

先に言及したように，「許可」を表す形式 (22) は「状況可能」を表す形式 (31) に似ている．「状況的に～が可能だ（＜状況が許し当該事態は出現する）」という認識的可能性（蓋然性）の意味から「～してよい，～であってよい（＜権限を持つ人や制度などが許すことによって当該事態は成立する）」という拘束的可能性（許可）の意味へ変化したのだろう．

「打消し反語」を表す形式 (29a) は，「動詞＋否定辞＋ *dây*」（*hǎa mîʔ dây* ‘探しても出現しない’ ＞ ‘あり得ない’） という語句を含み，「状況不可能」の形式 (30) に似ている．「状況的に～が不可能だ（＜状況が許さず当該事態は出現しない）」という認識的可能性（蓋然性）の意味から「当該事態が出現することはあり得ない」という「打消し反語」の意味へ変化したのだろう．

疑問詞，強意を表す小辞，*dây* などの組み合わせで「疑念反語」を表す形式 (29b) は「状況可能」の形式 (31) に似ている．「状況的に～が可能だ（＜状況が許し当該事態は出現する）」という認識的可能性（蓋然性）の意味から「どこでだというのか，

状況が許し当該事態が成立するというのは」という「疑念反語」の意味へ変化したのだろう.

表 6 に「許可」,「打消し反語」,「疑念反語」が関わる分化パタンの仮説を示す.

表 6：「許可」,「打消し反語」,「疑念反語」の分化パタン

| 分化時期： | ②の時期 | ③の時期 | ④の時期 |
|---|---|---|---|
| | 状況不可能→ | 打消し反語 | |
| | 状況不可能→ | 状況可能 | |
| | | 状況可能→許可 | |
| | | 状況可能→ | 疑念反語 |

### 5.3　「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化パタンの一般化

第 5.2.2.1 節と第 5.2.2.2 節で述べてきたことを表 7 にまとめる．表 7 には本稿の分析結果から想定することのできた「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化パタンしか含まれていない．それ以外のモダリティ概念の分化パタンについては，分析資料の不足により，結論付けには至らなかった。

表 7：「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化パタン

| 分化時期： | ②の時期 | ③の時期 | ④の時期 |
|---|---|---|---|
| | 状況不可能→ | 打消し反語 | |
| | 状況不可能→ | 状況可能 | |
| | | 状況可能→許可 | |
| | | 状況可能→ | 能力可能 |
| | | 状況可能→ | 疑念反語 |

「状況不可能」から「打消し反語」と「状況可能」が分化し,「状況可能」からまず「許可」が分化し，さらに「状況可能」から「能力可能」と「疑念反語」も分化したという仮説である.

高橋・新里 2005 および本稿の分析から導き出された「状況可能から能力可能へ」というタイ語の可能モーダルの意味変化の方向性は,「能力可能から状況可能へ」というこれまでの通説（e.g. Bybee 1988, Bybee et al. 1994, Traugott & Dasher 2002, van der Auwera & Plungian 1998）に合致しない．高橋・新里 2005 は，日本語の可能モーダル「なる」と「（いでく＞でく）できる」の意味変化の方向性も，タイ語の可能モーダルの意味変化の方向性と同じ「状況可能から能力可能へ」であると主張する．これま

での通説である「能力可能から状況可能へ」という可能モーダルの意味変化の方向性は普遍的なものではないといえるだろう.

表 7 の分化パタンは, 分化の起源概念と分化した後の概念の間に主観性の程度に差があるかないかという基準で大きく 2 つのグループに分類することができる.

(34)　分化の起源になったモダリティ概念と分化した後のモダリティ概念の間に主観性の程度差があるパタン：
「状況不可能→打消し反語」（③の時期）
「状況可能→許可」（③の時期）
「状況可能→疑念反語」（④の時期）

(35)　分化の起源になったモダリティ概念と分化した後のモダリティ概念の間に主観性の程度差がほとんどないパタン：
「状況不可能→状況可能」（③の時期）
「状況可能→能力可能」（④の時期）

図 8 と図 9 は (34) の分化パタンと (35) の分化パタンをそれぞれ図 1 の意味地図フォーマットに則って描いたものである. 図 8 の分化パタンの方向性は「客観的概念から主観的概念へ」であり, 図 9 の分化パタンの方向性は「非意志的概念から同じ非意志的概念へ」あるいは「非意志的概念から意志的概念へ」である.

| | | |
|---|---|---|
| *主観的*<br>↑<br>↓<br>*客観的* | 許可 | 疑念反語　打消し反語<br>↖状況可能↴　↰状況不可能<br>③　④　③ |
| | *意志的* | *非意志的* |

図 8：主観性の程度に差がある分化パタン

| | | |
|---|---|---|
| *主観的*<br>↑<br>↓<br>*客観的* | 能力可能 | ←状況可能　←状況不可能<br>④　③ |
| | *意志的* | *非意志的* |

図 9：主観性の程度にほとんど差がない分化パタン

以上，本稿では分析資料が限られているため「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化パタンしか導き出せなかったが，(36) のような一般化を得ることができた．ただし，(36) はあくまでも (36b)（意味変化の一方向性の仮説）を前提とした仮説である．

(36)　本稿の分析に基づく③の時期以降（1728 年以降）の「可能」文脈が関与するタイ語モダリティ概念の分化パタンに関する仮説：

a.　③の時期以降,「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化には図 1 の意味地図の縦軸あるいは横軸の値に変化が見られる場合もあれば, 大した変化が見られない場合もある．大した変化が見られないのは「非意志的モダリティ概念から同じ非意志的モダリティ概念へ」という分化である．

b.　縦軸の変化の方向性は，意味変化の一方向性の仮説（Traugott 1892, 1995, 1989）で主張されている「客観的モダリティ概念から主観的モダリティ概念へ」という方向である．

c.　横軸の変化の方向性は「非意志的モダリティ概念から意志的モダリティ概念へ」という方向である．

Narrog 2005a は,（意志的な）当為のモダリティと（非意志的な）認識のモダリティの間の意味変化の方向性には前者から後者あるいは後者から前者その両方があり得ると認めるが，いずれにせよ，より主観的なモダリティへの変化でなければならないと条件をつけている．本稿の (35)（図 9）に挙げた「分化の起源になったモダリティ概念と分化した後のモダリティ概念の間に主観性の程度差がほとんどないパタン」（「状況不可能→状況可能」,「状況可能→能力可能」）は Narrog の想定外の変化ということになるのか，それともそれぞれ多少なりとも後者のほうが前者より主観性が高くなっていると考えるべきなのか．主観性の尺度をどこまで精密にすべきか，議論の余地があると思われる．

## 6　おわりに

本稿ではタイ語の非現実性マーカーを取り上げ，その非現実性マーカーが生起する意味文脈の範囲が歴史的にどう変わってきたのかを，通時的言語資料を活用して考察した．その結果，18 世紀以降の「可能」文脈が関与するモダリティ概念の分化について (36) の仮説が導き出された．非現実性マーカーを持つ他の言語についても本稿のような通時的調査を行うことができれば, (36) の仮説はタイ語だけに当てはまるのか,

それとも他の言語にも当てはまるのかをはっきりさせることができるだろう．他の言語では違う分化パタンが見られることは当然あり得る．多くの言語を比較することで，非現実事態（モダリティ概念）の分化パタンについての類型論的な特徴が明らかになり，相対立する特徴を持つ限られた数の，しかもどの言語もそのいずれかに分類することができるような類型を導き出すことができるのではないかと思う．

## 参考文献

＜日本語文献＞

尾上圭介. 1999.「文の構造と“主観的”意味―日本語の文の主観性をめぐって・その２」『月刊日本語』28.1, 95-105.

尾上圭介. 2004.「主語と述語をめぐる文法」尾上圭介（編）『朝倉日本語講座第６巻：文法Ⅱ』, 1-57. 東京：朝倉書店.

黒滝真理子. 2005.『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性―モダリティの日英対照研究―』東京：くろしお出版.

高橋清子. 2007.「タイ語の非現実モダリティマーカー」『神田外語大学紀要』19, 189-210.

高橋清子・新里瑠美子. 2005.「タイ語と日本語の出現動詞の文法化」『日本認知言語学会論文集』5, 197-206.

ナロック，ハイコ．2001.『モダリティ表現の多義性：共時的バリエーションと通時的変化』博士論文、東京大学.

Narrog, Heiko. 2002.「意味論的カテゴリーとしてのモダリティ」大堀壽夫（編）『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』, 217-251. 東京：東京大学出版会.

三上直光. 1996.「タイ語の/càʔ/に関する覚え書」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』28, 197-212.

＜英語文献＞

Bisang, Walter. 2004. Grammaticalization without coevolution of form and meaning: The case of tense-aspect-modality in East and mainland Southeast Asia. In Bisang, Walter, Nikolaus P. Himmelmann, and Björn Wiemer (eds.) *What Makes Grammaticalization? A Look from its Fringes and its Components*, 109-138. Berlin: Mouton de Gruyter.

Bybee, Joan L. 1988. Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning. *Proceedings of the 14th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 247-264.

Bybee, Joan L. and Suzanne Fleischman (eds.) 1995. Modality in grammar and discourse: An introductory essay. In Bybee, Joan L. and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 1-14. Amsterdam: John Benjamins.

Bybee, Joan L., William Pagliuca, and Revere D. Perkins. 1991. Back to the future. In Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*, Vol.2, 17-58. Amsterdam: John Benjamins.

Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.

Booyapatipark, Tasanalai. 1983. *A Study of Aspect in Thai*. Ph.D. dissertation, University of London.

Chafe, Wallace. 1995. The realis-irrealis distinction in Caddo, the Northern Iroquoian Languages, and English. In Bybee, Joan L. and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 349-365. Amsterdam: John Benjamins.

Chung, Sandra and Alan Timberlake. 1985. Tense, aspect, and mood. In Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Vol. III: Grammatical Categories and the Lexicon*, 202-258. Cambridge: Cambridge University Press.

Diller, Anthony V. N. 1988. Thai syntax and "national grammar". *Language Science* 10.2, 273-312.

Diller, Anthony V. N. 1993. Diglossic grammaticality in Thai. In Foley, William A. (ed.) *The Role of Theory in Language Description*, 393-420. Berlin: Mouton de Gruyter.

Diller, Anthony V. N. 2001. Grammaticalization and Tai syntactic change. In Tingsabadh, M.R. Kalaya and Arthur S. Abramson (eds.) *Essays in Tai Linguistics*, 139-175. Bangkok: Chulalongkorn University Press.

Ekniyom, Peansiri. 1979. An internal reconstruction of auxiliaries in Thai. *Working Papers in Linguistics, University of Hawaii* 11-2, 55-65.

Ekniyom, Peansiri. 1982. *A Study of Informational Structuring in Thai Sentences*. Ph.D. dissertation, University of Hawaii.

Elliott, Jennifer R. 2000. Realis and irrealis: Forms and concepts of the grammaticalisation of reality. *Linguistic Typology* 4, 55-90.

Fleischman, Suzanne. 1995. Imperfective and irrealiis. In Bybee, Joan and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 519-551. Amsterdam: John Benjamins.

Givón, Talmy. 1982. Evidentiality and epistemic space. *Studies in Language* 6.1, 23-49.

Givón, Talmy. 1984. *Syntax: A Functional-Typological Introduction* Vol. 1. Amsterdam: John Benjamins.

Givón, Talmy. 1994. Irrealis and the subjunctive. *Studies in Language* 18.2, 265-337.

Hooper, Joan B. 1975. On assertive predicates. In Kimball, John P. (ed.) *Syntax and Semantics* 4, 91-124. New York: Academic Press.

Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkapirom. 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.

Johnson, Marion R. 1981. A unified temporal theory of tense and aspect. In Tedeschi, Philip, J. and Annie Zeanen (eds.) *Syntax and Semantics, Vol.14: Tense and Aspect*, 145-175. New York: Academic Press.

Kanchanawan, Nitaya. 1978. *Expression for Time in the Thai Verb and Its Application to Thai-English Machine Translation.* Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.

Kullavanijaya, Pranee. 1968. *A Study of Preverbs in Thai*. Master's thesis, University of Hawaii.

Lunn, Patricia V. 1989. Spanish mood and the prototype of assertability. *Linguistics* 29, 687-702.

Lunn, Patricia V. 1995. The evaluative function of the Spanish subjunctive. In Bybee, Joan and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 429-449. Amsterdam: John Benjamins.

Lyons, John. 1977. *Semantics*, Vol.2. Cambridge: Cambridge University Press.

Mithun, Marianne. 1995. On the relativity of irreality. In Bybee, Joan and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 367-388. Amsterdam: John Benjamins.

Muansuan, Nuttanart. 2002. *Verb Complexes in Thai*. Ph.D. dissertation, University at Buffalo, The State of University of New York.

Narrog, Heiko. 2005a. Modality, mood and change of modal meanings: A new perspective. *Cognitive Linguistics* 16-4, 677-731.

Narrog, Heiko. 2005b. On defining modality again. *Language Science* 27, 165-192.

Noss, Richard B. 1964. *Thai Reference Grammar*. Washington, D.C.: Foreign Service Institute.

Palmer, F. R. 1986(1st ed.). *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.

Palmer, F. R. 2001. *Mood and Modality (Second edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Prasithrathsint, Amara. 2006. Development of the *thùuk* passive marker in Thai. In Abraham, Werner and

Larisa Leisiö (eds.) *Passivization and Typology: From and Function*, 115-131. Amsterdam: John Benjamins.

Rangkupan, Suda. 2001. *Characteristics of Psychological Perspective in Thai Narrative Discourse*. Ph.D. Dissertation, The State University of New York at Buffalo.

Rangkupan, Suda. 2004. The scope of preverbal operators in Thai. *Journal of Language and Linguistics*, Thammasat University, 23-1, 13-28.

Sapir, Edward. 1930. Southern Paiute, a Shoshonean language. *Proceedings of the American Academy of Arts and Science*, 65-1. [In Bright William (ed.) 1992. The Collected Works of Edward Sapir X: Southern Paiute and Ute linguistics and Ethnography, 17-314. Berlin: Mouton de Gruyter.]

Savetamalaya, S. 1988. A Reanalysis of Auxiliaries in Thai. *Working Papers in Linguistics, University of Hawaii*.

Scovel, Thomas Scott. 1970. *A Grammar of Time in Thai*. Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.

Sindhvananda, Kanchana. 1970. *The Verb in Modern Thai*. Ph.D. dissertation, Georgetown University.

Srioutai, Jiranthara. 2004. The Thai càʔ: A marker of tense or modality? In Daskalaki, Evangelia et al. (eds.) *CamLing: Proceedings of the University of Cambridge Second Postgraduate Conference in Language Research*, 273-280. Cambridge: The Cambridge Institute of Language Research.

Sriphen, Salee. 1982. *The Thai Verb Phrase.* Ph.D. dissertation, University of Michigan.

Takahashi, Kiyoko. 2002. Temporal proximity: An organizing factor of four major aspects in Thai. *Journal of Hokkaido Linguistics Society* 2, 1-17.

Traugott, Elizabeth Closs. 1982. From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In Lehmann, Winfred P. and Yakov Malkiel (eds.) *Perspective on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.

Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65.1, 31-55.

Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in grammaticalization. In Stein, Dieter and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change.* Cambridge: Cambridge University Press.

van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. 1998. Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2, 79-124.

Whorf, Benjamin L. 1950. An American Indian model of the universe. *International Journal of American Linguistics* 16, 67-72.

＜タイ語文献＞

นววรรณ พันธุเมธา (náwáwan phanthúʔmeethaa). 1982 (1st ed.) / 1984. *wayyaakɔɔn thay*（タイ語文法）. Bangkok: rûŋrɯaŋsàat kaanphim.

พระยาอุปกิตศิลปสาร (phrayaa ʔùpakìt sǐnlápàsǎan). 1918 (1st ed.) / 1992. *làk phaasǎa thay*（タイ語の原則）. Bangkok: thaywátthanaaphaanít.

ไพทยา มีสัตย์ (phaythayaa miisàt). 1997. *kaan sùksǎa kham chûay kariyaa thîi klaay maa càak kham kariyaa nay phaasǎa thay*（タイ語の動詞から変化した助動詞の研究). Master's thesis, Chulalongkorn University.

## 資料

The Prime Minister’s Secretariat, Thailand. 1924 / 1978. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi nʉ̀ŋ*（石碑文集第 1 巻）. Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.

The Prime Minister’s Secretariat, Thailand. 1965. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi sǎam*（石碑文集第 3 巻）. Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.

The Prime Minister’s Secretariat, Thailand. 1970. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi sìi*（石碑文集第 4 巻). Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.

The Prime Minister’s Secretariat, Thailand. 1972. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi hâa*（石碑文集第 5 巻）. Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.

The Prime Minister’s Secretariat, Thailand. 1974. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi hòk tɔɔn thîi nʉ̀ŋ*（石碑文集第 6 巻第 1 号）. Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.

The Prime Minister’s Secretariat, Thailand. 1974. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi hòk tɔɔn thîi sɔ̌ɔŋ*（石碑文集第 6 巻第 2 号）. Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.

Pongsripian, Winai (ed.). 1991. *prachum silaacaarʉ́k phâak thîi cèt*（石碑文集第 7 巻）. Bangkok: The Prime Minister’s Secretariat.